國學院大學学術情報リポジトリ

「柿本人麻呂の妻」論：武田祐吉論を始点として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉住, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002348

「柿本人麻呂の妻」論
――武田祐吉論を始点として――

倉住　薫

はじめに

『古事記研究　帝紀攷』や『万葉集全註釈』などの著作により、上代文学研究者として名高い武田祐吉は、大正九年に、國學院大學講師となった。(1) 國學院大學には、武田の著作や蔵書や書簡類が、武田祐吉博士文庫として、寄贈されている。

武田の学問は、既に『武田祐吉著作集』全八巻という形で纏められており、武田学の一応の体系は確認できる。(2) しかし、個々の論文や、武田の様々な注釈書に対しては、文献学に基づいた堅実な手法、というイメージが先行するばかりで、個々の事例に則した厳密な跡づけがなされてきたとは言い難い。武田が、柿本人麻呂を理解するに当たって、人麻呂歌集を重視したことは、現在の柿本人麻呂研究において、あまり顧みられることはない。人麻呂歌集における武田学の意義については、拙稿「武田祐吉の柿本人麻呂研究―巻向歌群を中心に―」で述べた。(3) 本稿は、武田が人麻呂の妻をどのように理解していたかを、武田の著作『国文学研究　柿本人麻呂攷』によって確認することから始める。(4)

続いて、人麻呂作歌である泣血哀慟歌にあらわれる人麻呂の妻の造形を歌表現の検証を通じて、武田学の再検討・再評価を試みてみたい。

一、武田祐吉の柿本人麻呂論

武田は、大正五年に東京帝国大学万葉集校訂の嘱託として『校本万葉集』の発刊に従事したことを契機として、万葉集研究を本格化させる。大正十三年の六月には、学位請求論文「万葉集仙覚本の研究」を京都帝国大学に提出するなど、大正から昭和初期にかけて万葉集研究の文献学的基礎を固めていった。

武田は、大正十年に、自身最初の著作『上代国文学の研究』を上梓するのだが、「第二編　歌謡と漢文学」の「七　柿本人麻呂」で、万葉集の歌から導き出したと思われる柿本人麻呂の評伝を行う。(5) また「第四編　万葉集の撰定に関する研究」の「五―二　柿本朝臣人麻呂歌集」では、人麻呂歌集の季節分類や「弖爾乎波を用いないで詩のように書いた」人麻呂歌集の表記について言及している。次いで、昭和十年代には、二冊の柿本人麻呂を標題とする著作『柿本人麻呂』と『国文学研究　柿本人麻呂攷』（以下『柿本人麻呂攷』とする）とを発表した。(6) 武田の柿本人麻呂研究の特色は、武田自身が『柿本人麻呂』の序で述べるように、「従来人麻呂研究にあまり役立っていなかった」「人麻呂歌集の歌を活用した点」にあると言える。この時代、人麻呂歌集の歌は、人麻呂の歌としては、認められていなかった嫌いがある。一方、人麻呂作歌は、その題詞が無条件に受け入れられ、歌内容も事実であるとして歌人人麻呂の生涯を理解するために重要視されていた。武田が、この時期に柿本人麻呂と人麻呂歌集研究に力を入れたのは、昭和三年に石井庄司が、人麻呂歌集の歌を人麻呂自身の歌として研究対象とし、人麻呂歌集の用字法を検討した「人麻呂集

考」を発表したことや、久松潜一が『増訂　万葉集の新研究』の中で、人麻呂歌集の歌を「若き人麻呂」の歌として論じたこととも関連しているだろう。[7] 石井や武田の人麻呂歌集の表記への注目は、四半世紀を経て、昭和四十年代に画期をなす、人麻呂歌集表記「略体」「非略体」の論議を導くこととなった。[8] 渡瀬昌忠が「近代の人麻呂歌集研究は、大正期の武田研究（『上代国文学の研究』―引用者注）においてその胎動を開始し、昭和初年の石井考（「人麻呂集考」―引用者注）によって呱々の声をあげた」と述べるように、武田や石井の人麻呂歌集研究は柿本人麻呂研究史にとって、重要な嚆矢と位置付けられる。

『柿本人麻呂』の中で、武田は、人麻呂歌集に大和の巻向地方の歌が多いことに注目し、歌の内容から、巻向には人麻呂の「思ふ人が住んで居た」とする。武田の「巻向嬢子」という考え方は、現在の万葉集研究において「巻向歌群」として論じられており、重要な役割を果たしている。[9] だが、武田の人麻呂研究の成果は、人麻呂歌集のみに留まらない。柿本人麻呂作歌と人麻呂歌集とを合わせて考えることで、人麻呂の歌世界を豊かに描き出したことにある。

武田は、『柿本人麻呂』や『柿本人麻呂攷』の中で、人麻呂の思い人の一人として「巻向嬢子」を論じたが、人麻呂の他の作品に詠み込まれる女性についても、武田は考察しており、その中で、人麻呂歌集と人麻呂作歌とを結びつけ、人麻呂に関わった女性（たち）像を作り上げている。

本稿では、武田の描き出した「柿本人麻呂の妻」について論じていきたい。

二、武田の「柿本人麻呂の妻」論

武田祐吉著『柿本人麻呂攷』の「第二　柿本朝臣人麻呂歌集の研究（下）」には、「一　柿本人麻呂の妻」という章

がある。「柿本人麻呂の妻」は、十の節からなっており、一・二・三節では紀伊国作歌（⑨一七九六～一七九九）、四節では巻十一の人麻呂歌集所出の問答歌（⑪二五〇八・二五〇九）、五・六・七節目は、前述した「巻向嬢子」、八節は人麻呂の妻の歌、九節では人麻呂の妻の諸相、一〇節では妻の死として泣血哀慟歌（②二〇七～二一三）を中心にそれぞれ論じている。

人麻呂の歌に、人麻呂の実人生を見るとすれば、人麻呂には、少なくとも二人の妻がいたことになる。一人は、人麻呂がその死を歌った泣血哀慟歌に詠まれた妻であり、もう一人は、人麻呂の死を歌った依羅娘子（②一四〇、二二四・二二五）である。他にも、名前や素性の分からない女性への思いを人麻呂は、数多く詠んでおり、それらの女性をどのように考えるかによって、人麻呂の妻像は明瞭な輪郭を持ち始める。武田は、果たしてどのような人麻呂の妻像を導き出したのであろうか。「柿本人麻呂の妻」の論旨に沿って見ていくこととする。

一、紀伊国作歌の妻

まずは、紀伊国作歌から武田が、どのような柿本人麻呂の妻像を描き出したのかを確認しておきたい。以下に紀伊国作歌を挙げる。[10]

紀伊国にして作る歌四首

もみち葉の　過ぎにし児らと　携はり　遊びし磯を　見れば悲しも（⑨一七九六）

塩気立つ　荒磯にはあれど　行く水の　過ぎにし妹が　形見とそ来し（⑨一七九七）

古に　妹と我が見し　ぬばたまの　黒牛潟を　見ればさぶしも（⑨一七九八）

玉津島　磯の浦廻の　砂にも　にほひて行かな　妹も触れけむ（⑨一七九九）

紀伊国作歌は、人麻呂歌集非略体歌に当たり、愛しい女性を失った悲しみを歌う挽歌として名高い。人麻呂歌集の歌が、人麻呂自身の歌と認められることの少なかった時代に書かれたこの論では、まず紀伊国作歌が人麻呂の作であることの確認が行われる。武田が指摘するように二首目の一七九七番歌は、安騎遊猟歌の第二短歌と類歌である。

ま草刈る　荒野にはあれど　もみち葉の　過ぎにし君が　形見とそ来し（①四七）

確かに、一七九七番歌の「塩気立つ　荒磯」「行く水の　過ぎにし妹」が、四七番歌では「ま草刈る　荒野」「もみち葉の　過ぎにし君」と異なるが、二首は同じ構成をとっていると言ってよい。人麻呂歌集が人麻呂作歌と類似表現をもつことから、

人麻呂歌集の歌は、人麻呂の作であるか否かについては、問題の存するところであるが、他人の作と明記があり、ないしは婦人の作と認められるもののような、人麻呂の作品にあらじと考えられるもののほかは、大体人麻呂の作品であって差し支えがないのである。ことに紀伊国作歌のように、特殊の内容を有するものは、人麻呂の作品たるべき性質が強いのであり、巻の一との類歌関係があることによって、いっそうこれが首肯せられるべきである。

と、人麻呂歌集の歌を積極的に用いながら、人麻呂に関係した女性たちについて武田は論じるのである。

さらに、安騎野遊猟歌の「もみち葉の　過ぎにし君」が、紀伊国作歌の一首目で「もみち葉の　過ぎにし児ら」と表現されていることも見逃さない。安騎遊猟歌の「もみち葉の　過ぎにし君」とは、持統天皇三年春四月に亡くなった草壁皇子を指している。春の季節に亡くなった皇子を「もみち葉の　過ぎにし君」と表現することを、武田は、安騎野遊猟歌が詠まれた時期と関連すると考えているようである。その考えをもとに、

したがって今の歌（一七九六番歌―引用者注）の、黄葉の過ぎにし妹も、妻の死んだ季節の記憶でなくして、今紀

伊の国にあっての嘱目となるべきである。子等は、もとより複数ではない。かの人とさした一人があっていうのである。妻を失った作者は、秋の頃紀伊の国に旅行して、今は亡き妻を追憶しているのである。

と、人麻呂が、亡くなった妻との思い出の地である紀伊を秋の頃に訪ねたと推測している。さらに、この亡妻が、紀伊の国に住んだことにまで言及する。

紀伊国にして作る歌二首

我が恋ふる　妹は逢はさず　玉の浦に　衣片敷き　ひとりかも寝む（⑨一六九二）

玉櫛笥　明けまく惜しき　あたら夜を　衣手離れて　ひとりかも寝む（⑨一六九三）

紀伊の妻という発想は、同じく巻九雑歌部の人麻呂歌集に載る右の二首から導き出されたものである。武田は、一首目の「我が恋ふる　妹は逢はさず」を、

これは妹を訪ねても妹が逢ってくれない趣であるから紀伊の国に恋妻を有し、それを訪ねたとなすべきである。

と、理解した。全体の論旨からすると、武田は、この女性が、人麻呂と共に紀伊にやって来て、住んだ時期があったと考えているようである。武田が指摘するように、家で待つ妻に対しては、「妹は逢はさず」という表現はとらないであろう。果たして、この「妹」は、武田が述べるような紀伊在所の人麻呂の妻なのであろうか。『万葉集注釈』（澤瀉久孝）の「旅で見そめた女をいふのであろう」という見解や、『古典文学集成』が「旅先の一夜妻か」と述べるように、妻という立場の女性でなくとも「妹」と呼ぶことはあり、挽歌に収められた紀伊国作歌と、雑歌の紀伊国作歌とに詠まれた女性が同一人物と理解するには、問題がある。しかし、武田は、人麻呂の妻が紀伊にやってきたと、主張するのである。その理由を考えてみたい。

Ⅱ、宮仕えをする人麻呂の妻

武田は、人麻呂の妻が、紀伊にやってきたと考えていた。それは、夫である人麻呂の任国に付き添ってやってきた、という理解なのではない。「宮廷に奉仕する者として」、持統天皇四年の紀伊国行幸にお供して人麻呂と共にやって来た人麻呂の妻とは、すなわち「持統天皇の宮女」なのだと述べる。武田が、人麻呂の妻を宮廷に奉仕する者として考える根拠は、

伊勢国に幸せる時に、京に留まれる柿本朝臣人麻呂が作る歌

あみの浦に　船乗りすらむ　娘子らが　玉裳の裾に　潮満つらむか（①四〇）

釧つく　答志の崎に　今日もかも　大宮人の　玉藻刈るらむ（①四一）

潮さゐに　伊良虞の島辺　漕ぐ船に　妹乗るらむか　荒き島廻を（①四二）

この三首である。題詞から、伊勢国行幸時に人麻呂は都に留まったことが分かる。歌は、船に乗って行幸に付き従った恋人の様子を思ったものである。武田は、二首目の「釧つく」に注目し、「釧のような新しい装身具を用いる」のは、「宮廷に奉仕する夫人」であると、捉えた。

また、巻十一の人麻呂歌集所収の問答歌にも、宮女である人麻呂の妻の姿を見出す。

問答

天皇の　神の御門を　恐みと　さもらふ時に　逢へる君かも（⑪二五〇八）

まそ鏡　見とも言はめや　玉かぎる　磐垣淵の　隠りたる妻（⑪二五〇九）

武田は、一首目二五〇八番歌を「神霊殿に奉仕せる女官」の歌と見る。二五〇八番歌の「天皇」は、表記が「皇祖」であり、「スメロキ」と訓読する。通説であれば、底本とした『新編古典文学全集』が「天皇」と解釈するよう

に、現在の天皇とも理解でき、「天皇の　神の御門」とは、「天皇の御在所」となる。しかし、武田は、文献学的手法から、本文の「皇祖」という用字に注目し、万葉集における「皇祖」（⑥一〇四七）、「皇神祖」（③三二一・⑱四一一一）、「皇祖神」（⑦一一三三、⑲四二〇五）の用字を検討して、「天皇の　神の御門」とは、「皇祖の神霊を奉祀せる宮殿」であると結論づけた。[11] 武田は、この歌も、人麻呂の妻と人麻呂とが交わした歌と理解し、そこに人麻呂の実生活を読み取っているのである。

Ⅲ、「巻向嬢子」

この「巻向嬢子」についての詳細は、拙稿で述べたが、武田は、人麻呂歌集には、巻向地方の歌が多いことに注目し、巻向の地には、人麻呂の思い人が住んでいたと考えたのである。[12] 本稿との関連で重要となるのは、巻向歌群の中の、いずれも人麻呂歌集所出の巻十一と巻七の旋頭歌である。

泊瀬の　弓月が下に　我隠せる妻　あかねさし　照れる月夜に　人見てむかも（一に云ふ、人見つらむか）（⑪二三五三）

ますらをの　思ひ乱れて　隠せるその妻　天地に　通り照るとも　顕はれめやも（一に云ふ、ますらをの　思ひたけびて）（⑪二三五四）

児らが手を　巻向山は　常にあれど　過ぎにし人に　行き巻かめやも（⑦一二六八）

巻向の　山辺とよみて　行く水の　水沫のごとし　世人我等は（⑦一二六九）

巻十一の二首は、ともに巻向の地の隠り妻を歌ったものである。一首目の二三五三番歌は、巻向地方の弓月（弓月

が嶽、あるいは槻木）に妻を隠したが、人に見つかるのではないかと心配し、二首目の二三五四番歌では、ますらおである私が恋いこがれて隠した妻であるから、見つかるはずもない、と歌っている。この二首から、武田は、宮仕えする男性が、宮仕えの女性に恋をし、弓月に隠したのだと考えている。その宮仕えの女性と人麻呂とは、心を通わせるようになったが、巻七の二首にあるように、結局は亡くなってしまったのだと理解している。一二六八番歌は、「児らが手を　巻」くという共寝を思い出させる巻向山は、永遠に存在するのに、亡くなってしまった人には、腕枕もできない、という歌であり、武田は「過ぎにし人」を、人麻呂の妻とする。一二六九番歌は、一般に人生の無常を嘆く歌と理解されるのであるが、武田は、妻と死別した悲しみに対峙する我を見出したのであった。

さらに、巻向歌群の、

行く川の　過ぎにし人の　手折らねば　うらぶれ立てり　三輪の檜原は（⑦一一一九）

をとりあげ、「行く川の　過ぎにし人」と、紀伊国作歌の一七九七番歌「行く水の　過ぎにし妹」との表現の近似を指摘し、巻向歌群の「過ぎにし人」は、「紀伊の国に悲しい思い出を残した人と同じ人」と結論付けた。

Ⅳ、人麻呂の前妻と後妻

これまで確認してきたように、武田は、人麻呂と共に紀伊の国に赴き、巻向の地と縁の深い宮仕えの女性として、人麻呂の妻像を描き出した。その妻は、紀伊国作歌や巻向歌群で、亡くなったことが詠まれている。人麻呂の妻としては、人麻呂の死を詠んだ依羅娘子（②一四〇、二二四・二二五）も名を残しており、武田は後妻と呼ぶ。武田は、人麻呂と亡くなった前妻が詠み交わした歌として、人麻呂歌集の

妻に与ふる歌一首

雪こそは　春日消ゆらめ　心さへ　消え失せたれや　言も通はぬ（⑨一七八二）

妻の和ふる歌一首

松反り　しひてあれやは　三栗の　中上り来ぬ　麻呂といふ奴（⑨一七八三）

を挙げる。人麻呂の歌に対し、妻は、「麻呂といふ奴」という激しい語気の歌をもって応えた。それを武田は、妻の「なみなみならぬ才気の現われ」ととる。

また、同じく人麻呂歌集の

隼人の　名に負う夜声　いちしろく　我が名は告りつ　妻と頼ませ（⑪二四九八）

剣大刀　両刃の利きに　足踏みて　死なば死なむよ　君によりては（⑪二四九九）

の二首も前妻の歌であるとし、二四九八番歌から、前妻は隼人の夜声を耳にするような、宮廷に奉仕する女性であると捉える。また、二四九九番歌は、両刃を踏んで死ぬことも辞さないという強い決意の歌であり、当時の女性としては珍しく「強い心」をもった立派な女性であるとする。

一方、後妻である依羅娘子の歌をどう評価するかというと、

な思ひと　君は言へども　逢はむ時　いつと知りてか　我が恋ひざらむ（②一四〇）

今日今日と　我が待つ君は　石川の　貝に（一に云ふ、谷に）交じりて　ありといはずやも（②二二四）

直に逢はば　逢ひかつましじ　石川に　雲立ち渡れ　見つつ偲はむ（②二二五）

この三首に対し、「特に才気の鋭く情熱の燃えるがごときものは見いだせぬ」とする。

つまり、武田の理解では、前妻は「小野小町、和泉式部、紫式部、清少納言」に匹敵するような宮廷に奉仕した才女なのであり、後妻は「いまだ年の若い田舎のいわゆる長者の女」であった、ということになる。

Ⅴ、泣血哀慟歌の妻

武田は、『柿本人麻呂攷』「柿本人麻呂の妻」の最後で、泣血哀慟歌の妻に言及する。泣血哀慟歌の妻に関しては、第一歌群（②二〇七～二〇九）と第二歌群（②二一〇～二一二、或本歌群二一三～二一六）とで、歌われる対象が、同一人物であるのか、別人であるのか、現在の研究でも問題になっている。第一歌群長歌の二〇七番歌では、「里にしあれば　ねもころに　見まく欲しけど　やまず行かば　人目を多み　まねく行かば　人知りぬべみ」と、人目を憚る関係であったことが歌われ、一方の第二歌群長歌二一〇番歌では、「我妹子が　形見に置ける　みどり子の　乞ひ泣くごとに　取り与ふる　ものしなければ　男じもの　わきばさみ持ち　我妹子と　二人我が寝し　枕づく　つま屋のうちに」というように、一つ屋根の下で子まで成した妻が描かれている。第一歌群と第二歌群の妻の造形には、確かに相違が認められる。

筆者自身の泣血哀慟歌の解釈については、次節で歌表現をとりあげて詳述するが、武田は、泣血哀慟歌において、二人いたかのように思える妻を、同一人物として理解した。その妻とは、子を成したのだが、「軽の地に妻を有することになってからまだ日が浅かった」ので、人目を憚るように、妻の元を訪れたというのである。

泣血哀慟歌の妻について述べた後、「柿本人麻呂の妻」を、武田は、

幾人かの妻をしなせたのだともいえるけれども、おそらくは、軽にいた妻、巻向にいた妻、引手の山に葬った妻は、同じ人であったのではなかろうか。畝火山の蔭さすあたりを徘徊し、巻向山を仰ぎ見て歎息し、羽易の山を分けて索め歩き、また紀の国の海岸を泣いて彷徨した人麻呂の、面影に立って忘れがたき人が、その人であったのであろう。形見に残した緑児は、その後どうなったであろうか。これも今また知るよしもなき心残りである。

という文章で締めくくった。武田が論じた「柿本人麻呂の妻」とは、人麻呂と共に宮仕えをし、紀伊の国に赴き、巻

向の地に暮らしたこともあり、子どもを産み、軽の地で生涯を遂げた女性なのであった。[13] その妻の面影を求め、人麻呂は、羽易の山に行き、巻向の自然を愛で、紀伊の海岸の真砂に触れたと理解したのである。

三、泣血哀慟歌の妻

本節では、亡くなった愛しい女性への思いを、人麻呂がどのように歌うのかを理解するため、泣血哀慟歌における妻の造形について武田の言説をもとに論じる。

以下に泣血哀慟歌を挙げる。

柿本朝臣人麻呂、妻が死にし後に、泣血哀慟して作る歌二首并せて短歌

〈第一歌群〉

ア天飛ぶや　軽の道は　我妹子が　里にしあれば　ねもころに　見まく欲しけど　止まず行かば　人目を多み　まねく行かば　人知りぬべみ　さね葛　後も逢はむと　大船の　思ひ頼みて　イ玉かぎる　磐垣淵の　隠りのみ　恋ひつつあるに　渡る日の　暮れぬるがごと　照る月の　雲隠るごと　沖つ藻の　なびきし妹は　もみち葉の　過ぎて去にきと　玉梓の　使ひの言へば　梓弓　音に聞きて（一に云ふ、音のみ聞きて）　言はむすべ　せむすべ　知らに　音のみを　聞きてありえねば　我が恋ふる　千重の一重も　慰もる　心もありやと　我妹子が　やまず　出で見し言はむすべ　せむすべ知らに　音のみを　聞きてありえねば　我が恋ふる　千重の一重も　慰もる　心もありやと　我妹子が　やまず出で見し　軽の市に　我が立ち聞けば　玉だすき　畝傍の山に　泣く鳥の　声も聞こえず　玉桙の　道行き人も　ひとりだに　似てし行かねば　すべをなみ　妹が名呼びて　袖そ振りつる（或

本　名のみを　聞きてありえねば）（②二〇七）

短歌二首

秋山の　もみち葉をしげみ　惑ひぬる　妹を求めむ　山道知らずも（一に云ふ、路知らずして）（②二〇八）

もみち葉の　散り行くなへに　玉梓の　使ひを見れば　逢ひし日思ほゆ（②二〇九）

〈第二歌群〉

うつせみと　思ひし時に（一に云ふ、うつそみと　思ひし）　取り持ちて　我が二人見し　走り出の　堤に立てる槻の木の　こちごちの枝の　春の葉の　しげきがごとく　思へりし　妹にはあれど　頼めりし　児らにはあれど世の中を　背きしえねば　かぎろひの　もゆる荒野に　ウ白たへの　天領巾隠り　鳥じもの　朝立ちいまして入り日なす　隠りにしかば　我妹子が　形見に置ける　みどり子の　乞ひ泣くごとに　取り与ふる　ものしなければ　男じもの　わきばさみ持ち　我妹子と　二人我が寝し　枕づく　つま屋のうちに　昼はも　うらさび暮らし　夜はも　息づき明かし　嘆けども　せむすべ知らに　恋ふれども　逢ふよしをなみ　大鳥の　羽易の山に我が恋ふる　妹はいますと　人の言へば　岩根さくみて　なづみ来し　良けくもそなき　うつせみと　思ひし妹が　玉かぎる　ほのかにだにも　見えなく思へば（②二一〇）

短歌二首

去年見てし　秋の月夜は　照らせども　相見し妹は　いや年離る（②二一一）

衾道を　引手の山に　妹を置きて　山道を行けば　生けりともなし（②二一二）

或本の歌に曰く

うつそみと　思ひし時に　たづさはり　我が二人見し　出で立ちの　百枝槻の木　こちごちに　枝させるごと　春の葉の　しげきがごとく　思へりし　妹にはあれど　頼めりし　妹にはあれど　世の中を　背きしえねば　かぎるひの　もゆる荒野に　白たへの　天領巾隠り　鳥じもの　朝立ちい行きて　入り日なす　隠りにしかば　我妹子が　形見に置ける　みどり子の　乞ひ泣くごとに　取り委す　物しなければ　男じもの　わきばさみ持ち　我妹子と　二人我が寝し　枕づく　つま屋のうちに　昼は　うらさび暮らし　夜は　息づき明かし　嘆けども　せむすべ知らに　恋ふれども　逢ふよしをなみ　大鳥の　羽易の山に　ヱ汝が恋ふる　妹はいますと　人の言へば　岩根さくみて　なづみ来し　良けくもぞなき　うつそみと　思ひし妹が　灰にていませば（②二一三）

短歌三首

去年見てし　秋の月夜は　渡れども　相見し妹は　いや年離る（②二一四）

衾道を　引出の山に　妹を置きて　山道思ふに　生けるともなし（②二一五）

家に来て　我が屋を見れば　玉床の　外に向きけり　妹が木枕（②二一六）

泣血哀慟歌の妻については、前述したように、第一歌群と第二歌群とに描かれた妻が問題となる。この問題は、古くは、契沖が『万葉代匠記』で同一人説を唱え、賀茂真淵が『万葉考』において別人説を説いている。契沖や真淵の時代において、人麻呂作歌は、人麻呂個人の生涯を証明するものとして採り上げられており、この同一人説、別人説というのも、人麻呂の妻像と結びついているのである。武田は、泣血哀慟歌の妻を、『全註釈』の中で、「軽の地を本居とし」、持統天皇に仕えた「才媛で歌をもよくした人」と理解している。このように、武田は歌から歌人の実人生を見出しているが、今日、泣血哀慟歌の研究においては歌の「仮構性」が前提となっている。[14] そのため妻像も、その

文脈で論じられるが、そこから立ち上がる妻像は、意外にも武田が想定した妻の姿と酷似しているのである。

一、第一歌群の妻

泣血哀慟歌の第一歌群が、允恭記に登場する軽太子と軽嬢子との伝承と発想や辞句と類似していることは、伊藤博によって指摘された。[15] さらに渡辺護は、軽太子と軽嬢子の伝承が、泣血哀慟歌の構想に積極的に用いられていると述べた。[16] 類似表現をもつ、允恭記の軽太子伝承は、天田振と称される歌謡である。[17]

かく歌ひて、参ゐ帰りて、白ししく、「我が天皇の御子、いろ兄の王に兵を及ること無かれ。若し兵を及らば、必ず人、咲はむ。僕、捕へて貢進らむ」とまをしき。爾くして、兵を解きて、退き坐しき。故、大前小前宿禰、その軽太子を捕へて、率て参ゐ出でて、貢進りき。其の太子、捕へられえて歌ひて曰はく、

天廻む　軽の嬢子　甚泣かば　人知りぬべし　波佐の山の　鳩の　下泣きに泣く（八二）

又、歌ひて曰はく、

天廻む　軽の嬢子　確々にも　寄り寝て　通れ　軽嬢子ども（八三）

故、其の軽太子は、伊余湯に流しき。亦、流さむとせし時に、歌ひて曰はく、

天飛ぶ　鳥も使そ　鶴が音の　聞えむ時は　我が名問はさね（八四）

この三つの歌は、天田振そ。

渡辺は、七八番歌謡から九〇番歌謡でなりたつ、軽太子と軽嬢子との悲恋伝承全体を、泣血哀慟歌第一歌群に関わるものと見る。しかし、泣血哀慟歌で用いられる表現との類似は、ここに挙げた天田振と称される八二・八三・八四番歌謡のみであり、渡辺の意見は首肯しがたい。泣血哀慟歌第一歌群は、傍線部ア「天飛ぶや　軽の道は　我妹子が

里にしあれば」と歌いだす。武田は、『全註釈』の中で、「その妻は多分軽氏であったのであろう。出でて持統天皇に仕え、いつのころから、多分軽の里にいて、そこで死んだのであろう。」と、軽の地と妻との関連性を説いている。しかし、地名の共通性だけでなく、この軽の里の我妹子は、天田振の軽の嬢子と重なる。軽の嬢子は、八二番歌謡で「甚泣かば　人知りぬべし　波佐の山の　鳩の　下泣きに泣く」と歌われるように、人目を憚る隠り妻なのである。一方、泣血哀慟歌でも「ねもころに　見まく欲しけど　やまず行かば　人目を多み　まねく行かば　人知りぬべみ」と、会いたいけれども、人目を憚る妻であることが歌われている。武田は、宮仕えする女性であるが故の人目を避ける恋と理解するが、泣血哀慟歌と天田振の表現の類似は、どのように理解できるのであろうか。泣血哀慟歌が天田振を下敷きにし、軽の妻を発想したとも考えられるが、平舘英子は、後半に出てくる「軽の市に　我が立ち聞けば」との表現と合わせて、軽の土地の意義に注目する。[18] この文脈は、一般には、「玉梓の　使ひ」に「渡る日の　暮れぬるがごと　照る月の　雲隠るごと　沖つ藻の　なびきし妹は　黄葉の　過ぎて去にき」と、我妹子が亡くなったことを聞いたので、我妹子の面影を求めて「軽の市」に行ったと理解されている。しかし、平舘は、「渡る日の　暮れぬる（晩去）がごと」を「渡る日の　暮れゆくがごと」、「過ぎて去にき（伊去）」を「過ぎていゆく」と、旧訓に戻って訓むことで、「玉梓の　使ひ」が、「「妹」が生死の境を越えてしまったと報告に来たのではなく、その境を越えつつあることを知らせに来た」と理解する。我妹子が今にも死にゆくことを聞き、「軽の市」に出向いたのである。「軽の市」とは、「言霊の通う夕占問う場」であったと述べる。さらに平舘は、日本書紀の推古天皇二十年の記事から、

二月の辛亥の朔にして庚午に、皇太夫人鹽媛を檜隈大陵に改め葬る。是の日に、軽の街に誄たてまつる。第一に、阿倍内臣鳥、天皇の命を誄たてまつり、則ち霊に奠る。[19]

「誄」が、「軽の街」で行われており、古代において「軽の街」が「「霊」が改葬によって死の世界へ移る、その境

の地として認識されていた」と結論づける。「軽の街」とは、推古紀の記事が語るように、いわゆる殯宮儀礼を行う地であったのである。「晩去」「伊去」が「くれゆく」「いゆく」と訓めるかどうかについては疑問が残るが、軽の地は、死者との境界の地とされており、夕占を「軽の市」へ聞きに行ったと解釈することには、説得力がある。また、軽の地は、万葉集において、

天飛ぶや　軽の社の　斎ひ槻　幾代まであらむ　隠り妻そも（⑪二六五六）

と、軽の社の槻木の下にいる隠り妻が詠まれている。槻木の下の隠り妻は、二節でも触れた人麻呂歌集旋頭歌とも関連する。

長谷の　弓月（弓槻）が下に　隠したる妻　あかねさし　照れる月夜に　人見てむかも（一云　人見つらむか）

（⑪二三五三）

本稿で万葉集の底本とした『新編日本古典文学全集』は、「ユツキ」を「弓月が岳」と理解しているが、本文の表記を活かすならば、「ゆ槻」であり、聖樹である槻木の下にいる隠れ妻と理解できる。槻木の下での逢瀬は、村山出が述べるように、神婚のイメージを持ちさえもする。[20] こうしたことから、二六五六番歌も軽の社で奉祀する女性が隠り妻として描かれていると読みとることも可能なのではないだろうか。さらに泣血哀慟歌の第二歌群二一〇番歌でも、我妹子を回想する文脈で、「取り持ちて　我が二人見し　走り出の　堤に立てる　槻の木の　こちごちの枝の　春の葉の　しげきがごとく　思へりし　妹」と、槻木の豊かな生命力によって妹を造形しており、槻木と関連する女性として描いているとも理解できよう。

次に、泣血哀慟歌の第一歌群の傍線部イ「玉かぎる　磐垣淵の　隠りのみ」という表現を検討してみたい。この表現は、二節で採り上げた人麻呂歌集の問答歌に見える。

天皇の　神の御門を　恐みと　さもらふ時に　逢へる君かも（⑪二五〇八）

まそ鏡　見とも言はめや　玉かぎる　磐垣淵の　隠りたる妻（⑪二五〇九）

この二首は、武田が、宮仕えの男性である人麻呂と、宮仕えの女性である妻との人目を憚る恋を論じた歌であった。

泣血哀慟歌では、歌い手の心情を「玉かぎる　磐垣淵の　隠りのみ　恋ひつつあるに」と表しているのであるが、この心情叙述の前に「ねもころに　見まく欲しけど　やまず行かば　人目を多み　まねく行かば　人知りぬべみ」と、軽にいる我妹子を、隠り妻にしている状況が歌われている。この隠り妻の叙述に対応して「玉かぎる　磐垣淵の　隠りのみ　恋ひつつあるに」という心情が導き出されたと考えられる。

以上のように、泣血哀慟歌の第一歌群の妻に関する表現を押さえてきた。泣血哀慟歌の第一歌群の妻は、「天飛ぶや　軽の道は　我妹子が　里にしあれば」と歌い出される、軽の地の我妹子である。その我妹子は、神聖さがゆえに、人目を憚る隠り妻という発想をもって描かれているのであろう。

また、この妻に関する夕占を聞くために、殯宮儀礼の場となる「軽の市」に歌い手は出向いた。その妻はまだ、歌い手と交流可能な妻なのであって、それ故、この長い長歌の末尾で「袖そ振りつる」と、妻の魂を呼び寄せようとするのである。

Ⅱ、第二歌群の妻

第二歌群の人麻呂の妻について考えていきたい。泣血哀慟歌の第二歌群では、「つま屋の内に」共に住み、子までなした妻が描かれる。また、第二歌群には、或本の歌として、二一三・二一四・二一五・二一六番歌があり、第一歌群や、第二歌群本文歌（二一〇～二一二）との関連が複雑に論じられているのだが、本稿では、そのような問題には

立ち入らず、第二歌群の妻が、どのように発想されているのかという視点で、或本の歌の表現も見ていくことにする。[21]主にとりあげるのは、本文歌の表現となる。第二歌群は、「うつせみと　思ひし時に（一に云ふ、うつそみと　思ひし）取り持ちて　我が二人見し　走り出の　堤に立てる　槻の木の　こちごちの枝の　春の葉の　しげきがごとく　思へりし　妹」と、亡くなった妻を、生命力豊かな槻木の様子に照らし合わせながら回想するところから始まる。その妹は、鳥のように去って行き、みどり子を残していってしまったのである。残された歌い手は、途方に暮れるのだが、「羽易の山」に妹がいると、人が言ったので、妹を求めに山に入っていく。しかしながら、山に行っても妹を「ほのか」だけも見ることもできなかった、と長歌は閉じられる。妻の像だけでなく、妻との隔絶感もまた、第一歌群とは異なっている。軽の地に行き「袖そ振りつる」と、死者との交流を願ったこととは、趣を異にする。

第二歌群では、妹が亡くなった様子が、傍線部ウ「白たへの　天領巾隠り　鳥じもの　朝立ちいまして　入日なす隠りにしかば」と歌われる。「白たへの　天領巾隠り」とは、葬送儀礼の描写として通常は理解されている。武田の『全註釈』では、「白たへの天領巾」が、「火葬の煙に思い寄せて」の表現であり、「火葬の煙と共に去った」と解釈している。「領巾」は、装身具であることから、妻の造形にとって重要である。「領巾」は万葉集において、松浦佐用比売伝説を歌う歌群で多く用いられている（⑤八六八、八七一～八七四、八八三）。しかし、泣血哀慟歌のように、「天領巾」を歌う歌は珍しい。

……玉巻きの　ま櫂もがも（一に云ふ、小棹もがも）　朝なぎに　いかき渡り　夕潮に（一に云ふ、夕にも）　い漕ぎ渡り　ひさかたの　天の川原に　天飛ぶや　領巾片敷き　ま玉手の　玉手さし交へ　あまた夜も　寝ねてしかも（一に云ふ、眠もさ寝てしか）　秋にあらずとも（一に云ふ、秋待たずとも）……（⑧一五二〇　山上憶良）

秋風の　吹き漂はす　白雲は　織女の　天つ領巾かも（⑩二〇四一）

の二首のみである。この二首は、ともに七夕歌であり、織り姫の「領巾」を歌っている。一五二〇番歌からは、飛翔の道具であったことも確認できる。居駒永幸は、泣血哀慟歌の「白たへの　天領巾隠り」を、「この世のものでない神聖なまっ白い領巾に身を隠して」、「他界へと飛び立っていった」と解釈している。[22] 泣血哀慟歌の第二歌群の「天領巾」は、七夕歌と発想を同じくするのである。

また、第二歌群の或本の歌二一三番歌では、羽易の山に妹がいると言った人の言葉が傍線部エ「汝が恋ふる」という、間接話法になっている。この「汝が恋ふる」という表現は、人麻呂歌集の歌に見える。

汝が恋ふる　妹の命は　飽き足らに　袖振る見えつ　雲隠るまで（⑩二〇〇九）

この二〇〇九番歌は、七夕歌である。織り姫はずっと袖をふっていると、彦星に告げた歌であり、汝とは彦星のことであり、「汝が恋ふる　妹」とは織り姫を指している。この歌は、使者の役割を担う月人壮子が、彦星に告げた言葉であると、理解できる。[23] 言葉を告げる第三者の存在があって初めて創出される表現と言える。泣血哀慟歌の第二歌群では、織り姫の呪具であった「天領巾」に身を隠し、他界へと旅立った妹が既に描かれており、歌い手は途方に暮れている。そんな時に、思いがけない報せを第三者が告げたのである。

以上、泣血哀慟歌の第二歌群の表現から、第二歌群は、七夕歌と類似の発想があることを述べてきた。[24]

泣血哀慟歌の妻は、第一歌群と第二歌群とで、別人であるのか、同一人物であるのかが、問題となっていた。それは、歌から実像を探っていく手法である。本稿では、泣血哀慟歌の妻がどのように造形されているのかを、個々の表現からおっていく手法をとった。第一歌群は、聖なる隠り妻として人麻呂の妻が造形されており、その妻と共にいつまでもありたいと願う歌群である。第二歌群は、年に一度しか会うことの出来ない七夕歌と同様の発想をもつ歌群であり、妻との隔絶感がある。歌から人麻呂の妻の実像に迫った武田もまた、泣血哀慟歌の第一歌群においては、宮仕

えをする隠り妻、と結論づけていた。

おわりに

武田は、「柿本人麻呂の妻」の中で、人麻呂歌集と人麻呂作歌を合わせることで、人麻呂の妻の実像に迫ろうとした。万葉集の歌を、事実として理解することはできない。しかし、武田が論じたように、人麻呂歌集と人麻呂作歌には、「亡妻」のような共通したテーマがあることも事実である。人麻呂の個々の作品をより深く論じるためには、その共通したテーマを見逃してはならないだろう。

本稿では、泣血哀慟歌を中心に、人麻呂が亡くなった妻を描くに当たって、どのような発想を用いたのかを論じた。実像を追求した武田が、泣血哀慟歌の第一歌群の妻の造形に、宮仕えをする女性としての隠り妻をみたように、第一歌群の妻には、聖なる女性としての隠り妻の発想があるということを、歌表現の検討を通して確認できた。だが、泣血哀慟歌には、第二歌群において武田の指摘しなかった、七夕歌の発想が認められたのも重要である。武田の出した結論を、個々の歌表現の検討から、実証するのが、今後の人麻呂研究における課題となるだろう。

注

（1）武田祐吉『古事記研究　帝紀攷』（青磁社、昭和19年1月　後に『武田祐吉著作集　第一巻』（角川書店、昭和48年3月）所収）、『万葉集全註釈』全十六冊（改造社、昭和23年8月～昭和26年4月）

（2）『武田祐吉著作集』全八巻（角川書店、昭和48年3月）

（3）拙稿「武田祐吉の柿本人麻呂研究―巻向歌群を中心に―」（『國學院雑誌』107―11、平成18年11月）

(4) 『国文学研究　柿本人麻呂攷』（大岡山書店、昭和18年7月　後に『武田祐吉著作集　第七巻』（角川書店、昭和48年3月）

(5) 武田祐吉『上代国文学の研究』（博文館、大正10年3月）

(6) 武田祐吉『柿本人麻呂』（厚生閣、昭和13年4月）、注4同書『国文学研究　柿本人麻呂攷』

(7) 石井庄司「人麻呂集考」（『国語国文の研究』22、昭和3年6月）、久松潜一『増訂　万葉集の新研究』（至文堂、昭和4年11月）。

(8) 代表的なものとして、後藤利雄『人麿の歌集とその成立』（至文堂、昭和36年10月）、阿蘇瑞枝『柿本人麻呂論考』（桜楓社、昭和47年11月）、渡瀬昌忠（桜楓社、昭和48年11月　後に、『渡瀬昌忠著作集　第一巻　人麻呂歌集略体歌論上』（おうふう、平成14年9月）所収）、稲岡耕二『万葉集表記論』（塙書房、昭和51年11月）などがある。

(9) 武田の巻向歌群論については、注3の拙稿で述べた。

(10) 万葉集の引用は、小学館『新編日本古典文学全集』万葉集①～④に拠る。

(11) 折口信夫は、大正五年に出版された『口訳万葉集』（折口信夫全集　第四巻、中央公論社、昭和29年11月）の中で、「御先祖代々の神様をお祀りしてある、宮の畏れ多さに慎んで、お附き添ひ申してゐた時に、出会うて契り交わした、お方であることよ。（此は、斎宮或は、賢所などに仕へて居られる、高貴の女性の歌と思はれる。）と、述べている。

(12) 注3拙稿

(13) 紀伊国作歌、巻向歌群、泣血哀慟歌の妻が一人の女性であることを、武田祐吉を踏まえ、橋本達雄が「人麻呂歌集巻向歌群の歌」（『専修国文』34、昭和59年1月）で述べている。

(14) 伊藤博が「歌俳優の哀歓」（『上代文学』19、昭和41年12月、後に『万葉集の歌人と作品　上』（塙書房、昭和51年4月）所収）で、泣血哀慟歌が、人麻呂の妻の死をもとに「虚構」化された作品であると論じ、その「仮構性」の内実を、金井清一が「「軽の妻」存疑―人麻呂作品の仮構性―」（『論集上代文学』昭和45年11月）において論じた。

(15) 注14伊藤論文

(16) 渡辺護「泣血哀慟歌二首―柿本人麻呂の文芸性―」（『万葉』77、昭和46年9月、後に『万葉挽歌の世界』（世界思想社、平成5年10月）

(17) 古事記の引用は、小学館『新編日本古典文学全集』に拠る。

(18) 平舘英子「天飛ぶや　軽の道は」の構想」(『万葉』125、昭和62年2月、後に『万葉歌の主題と意匠』(塙書房、平成10年2月))

(19) 日本書紀の引用は、小学館『新編日本古典文学全集』に拠る。

(20) 村山出「斎槻樹下の恋―柿本人麻呂歌集旋頭歌二首の基礎的検討」(『万葉集研究』22、塙書房、平成10年7月)

(21) 第二歌群の本文歌と或本の歌の問題については、拙稿「泣血哀慟歌に見る死の表現性―本文歌群と或本歌群との比較から―」(『國學院雑誌』106―10、平成17年10月)で論じたことがある。

(22) 居駒永幸「白栲の天領巾隠り―柿本人麻呂泣血哀慟歌における幻視の表現をめぐって―」(『万葉研究』昭和62年9月)

(23) 使者月人壮子については、渡瀬昌忠「人麻呂歌集七夕歌群の構造―その第三十一まで―」(『万葉』169、平成11年4月後に『渡瀬昌忠著作集　第四巻』(おうふう、平成14年12月)に所収)

(24) 多田元は、泣血哀慟歌と七夕歌の関連を説いている。多田は、天田振が歌われる祭において、「「軽嬢子」は祭の中で演じられる性愛の物語の主人公」であり、「祭の日にのみ思い人と結ばれ、その日以外は忍ぶ恋に耐える姿で歌われる」と説く。また、「人麻呂は軽の地を舞台にした「天田振」の恋物語を、その祭の世界でのありようを充分に踏まえた上で、「別離」の悲しみを最大限に昇華させた形として、妻の死という構想を獲得していったと考えられる。その道筋は、すでに「七夕歌」に準備されていたものであろう。その基層は祭の歌声とでも言うべきかと思う。」と述べている。

多田元「市の歌声―「泣血哀慟歌」の基層と表層」(『國學院大學大学院　文学研究科論集』平成15年3月)

本稿の第三節「泣血哀慟歌の妻」は、平成二十年十一月に急逝された指導教授の青木周平先生の発言から着想を得たものである。青木先生は、平成二十年七月二十四日に行われた、國學院大學公開古典講座「万葉集『巻二』を読む」の「柿本人麻呂―泣血哀慟歌の表現」の講座担当者であった。